

# 清末中国の日本語教育水準を代表する教科書

— 郭祖培・熊金寿著『日語独習書』 —

吉田 則夫 ・ 劉 建雲\*

1899年春、東本願寺が中国の華中方面にいくつかの東文学堂を設立した。金陵東文学堂はそのなかでもっとも成功した一例である。本稿は、金陵東文学堂の卒業生により作成された『日語独習書』(1903)を掘り起こし、その著者と成立刊行の経過、作成原則、構成、内容、特徴などを考察し、同時期の植民地台湾の日本語教科書との関連性を検討した。そして、本書の清末中国の日本語教育における重要な位置と意義を明らかにし、日本語教育史における清末東文学堂の口語指導用の教材史料の不十分による研究の空白を埋める。

Keywords : 日本語教育史, 日語独習書, 金陵東文学堂, 清末中国

## 1. 清末中国の日本語教育と教科書

中国における本格的な日本語教育は、日清戦争から2年後の1897年3月、中国史上最初の外国語学校である京師・広州両同文館から始まった<sup>1)</sup>。その後、維新変法(1898)の機運に乗って、「東文学堂」という数多くの日本語学校が創られ、史上初の日本語学習ブームが中国全土に広がった。

この時代の東文学堂は、日本語教育を施し日本文化を生徒に理解してもらおうという現在の日本語学校の状況と多少異なっていた。京師・広州両同文館の日本語教育は、戦後日増しに頻繁になった日中交渉に必要な日本語の人材を育てることが第一目的だったとすれば、東文学堂の場合はそれ以外に、創設者にも学習者にも、当時の日本で通用していた擬漢文や、漢文書き下し・漢文調の仮名交じり文を解説し、日本語訳された西洋の書物を読み、翻訳して、いち早く近代文明を導入しようという、時代の要請に応じた傾向が認められる。一部には大量に渡航した日本人を活用して中国の近代基礎教育を構築しようとする動機づけが強かった。このような時代を背景に現れた東文学堂、およびそこで行われた日本語教

育は実に多彩なものであった。

### 1.1 特徴のある教授法

明治期の日本語は言文分離が著しかったことについて、すでに劉建雲著『中国人の日本語学習史—清末の東文学堂—』(学術出版会, 2005年)第7章第1節「中国人の日本語学習の動機と教育の課題」で考察を行った<sup>2)</sup>。1898年、戊戌維新の失敗で日本に亡命した梁啓超が当時の日本語を次のように認識している。文章語の7, 8割は漢字で、漢字を使わないのは接続詞や助詞の類に過ぎない。そういう接続詞や助詞などよく使うものを取り出してしっかり覚え、さらに「実字が先、虚字が後ろ」という語順を転倒して読む「簡便之法」を習得しておけば、「聡明な者は十日間、愚鈍な者は二カ月で、皆日本の本を興味津津に読めるようになる(慧者一句、魯者兩月、無不可以手一卷而味津津矣)」<sup>3)</sup>。その「簡便之法」を、彼なりの理解で中国語の文法・語順と対照させながら詳しく説明したのが、『和文漢読法』(梁啓超・羅普著, 1900年)<sup>4)</sup>という一世を風靡した109ページ程度の小さな本である。

岡山大学大学院教育学研究科 国語教育講座 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

\*岡山大学言語教育センター 非常勤講師

The Best Textbook of Japanese-language Teaching in the Late Ch'ing Era; Japanese-language textbook by GUO Zupai & XIONG Jinshou

Norio YOSHIDA and Jianyun LIU\*

Department of Japanese Language Education, Graduate School of Education; Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama city 700-8530

\*Language Education Center; Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama city 700-8530

『和文漢読法』といえ、梁啓超の『和文漢読法』を指すが、梁啓超が主張した上記の日本語学習・教授の「簡便之法」は、梁啓超以前の、早期日本語を習得した中国人教師が工夫した一種の速成的な教授法であり、最初に操ったのは北京東文書院で蔡元培などの翰林学士らを相手に日本語を教えていた陶大均であって、清末では一つの流行として主に中国人の日本語教師が好んで使っていた。この「簡便之法」を「時代の特徴をもつ」一つの教授法として「和文漢読法」<sup>5)</sup>と名付け、対中国人の日本語教育という歴史の流れの中で位置づけしたのは、前掲劉建雲著『中国人の日本語学習史— 清末の東文学堂 —』(以下「劉著」と略す)である。

清末の日本語教育現場で流行していた、もうひとつの速成的な教授法は、「漢文和訳法」であると、前掲劉著 [2005] が結論し名づけている。要するに、漢文訓読のことである<sup>6)</sup>。「和文漢読法」と同工異曲の妙があり、狙いは漢文訓読の方法を教えることを通じて、日本語の基本的な文法を習得させることである。この方法は主として漢学・漢文が得意な日本人教師が用いていた。それは学習者の「功を急ぐ」心理を満足させただけでなく、教師と学習者との間を隔てた言語の壁をも見事に払い除けたのである。

「和文漢読法」にせよ「漢文和訳法(漢文訓読)」にせよ、いずれも訳書が目的で、しかも速成を図るといふ変法維新の必要性に応じて生まれた音声言語を抜きにする教授法であり、その使用には学習者も教師も漢文に通じることが条件とされる。

## 1.2 教科書

「和文漢読法」や「漢文和訳法」を操った日本語教師の多くは、擬漢文や漢文古典を教材に使っていた。清末中国に流布した日本語教科書を見れば、『和文漢読』、『和文釈例』、『和文奇字解』、『四書和文必読』、『和文漢語』などの書名が目立つ<sup>7)</sup>。北京東文書院で蔡元培らに教えていた野口多内は『論語』や『韓非子』を使っていた。北京東文学堂の中島裁之は憲法や政治・経済・財政・法律・外交・歴史などの専門書のなかで、「憲法ノ文句至極簡單ニ且各条項ヲ以テ意味ヲ結シアルヲ初学者ニ向ヒ日本文ヲ教ユルハ最モ便利也」と言い、教材として日本の憲法を重宝していた。

清末の日本語教育を特徴づけたのは上記のような擬漢文や漢文古典を教材にした速成教育であったが、それはすべてではない。最初に教壇に立った日本人教師のほとんどは明治期の日本国内で使用した国語教科書を教材として用いた。明治期の国語教科書は気が遠くなるほど大量にあり、具体的にどの学

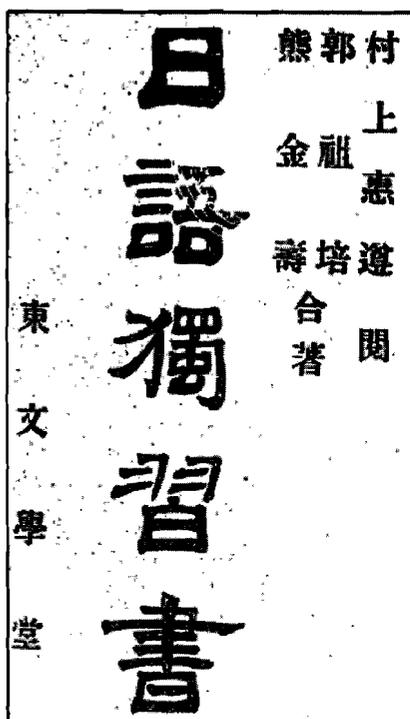
堂がどこの出版社の国語教科書を使い、その教科書の内容はどうだったかは、史料が詳しくないため、特定できなかった場合が多かった。現在判明できたのは、福州東文学堂の岡田兼次郎の場合は、明治20年(1887)文部省編『尋常小学読本』を使い、広州同文館の長谷川雄太郎は新保盤次著金港堂刊『日本読本』、『高等日本読本』のようなものを教材に用いた<sup>8)</sup>。極端な教材不足によるこのような日本の国語教科書を教材として代用する日本語教育の現場の状況は戦時中まで続いた。

ただし、明治期の国語教科書も漢文調の仮名交じり文が中心であった。人的な交流に不可欠な口語の指導は、口語文法体系の未形成、先行経験や教材・教科書の皆無などの制限で、教師にとっては至難の技であった。広州同文館の長谷川雄太郎は3年の試行錯誤を経て、『日語入門』(善隣書院、1901年)という史上最初の中国人向けの口語日本語教科書を著した<sup>9)</sup>。これが中国の教育現場で作成した最初の教科書であり、唯一の教科書でもあった。

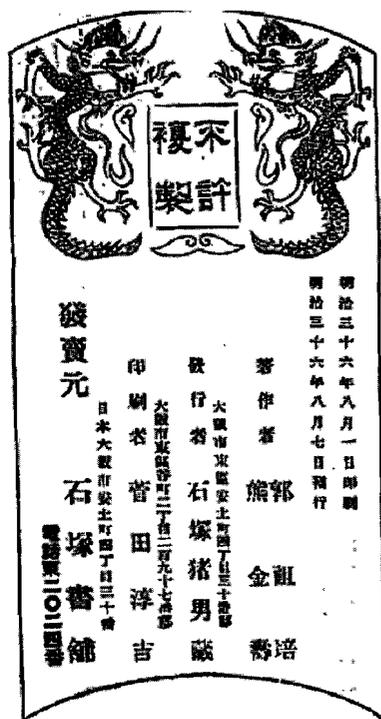
清末中国の日本語教科書を研究している浙江大学都市学院日語系教師李小蘭は「試論清末東文学堂日語教科書」<sup>10)</sup>という論文で、杭州駐防軍内に開設した東文学堂に勤めていた日本人教習熊文信三が編集した『東文課本』(期刊。杭州東文学社発行、1902年)を掘り起こし、その内容を紹介している。氏の紹介によれば、この『東文課本』は、「東文課本編行章程」2頁、「日本字母片仮名五十音図」と品詞表8頁、「漢訳国語読本」16頁、「『東文課本』第1期『脈絡詞篇(氏が「助詞」と訳している)』」33頁、附「東文符号字」2頁、奥付1頁からなり、計61頁の小冊子である。また、「頁がつながっていない」だけでなく、4割近くの内容は「漢訳国語読本」、つまり国語教科書の中国語訳である。「脈絡詞篇」の33頁だけが著者が新しく作成したものと考えられるが、分量的にとっても「課本(教科書)」の体裁がなっているとは思えない。この「脈絡詞篇」が期刊「『東文課本』第1期」として発行されたもので、「第2期」、「第3期」はまだ見つかっておらず、実際に発行したかどうか不明である。

李小蘭はその論文の中で『東文課本』を「現在見られる東文学堂より発行された唯一の日本語教科書」だと評価している。しかし、本稿で紹介する郭祖培・熊金寿著、村上惠尊の『日語独習書』は、現在見られる、同文館・東文学堂を含む清末中国の日本語教育の全体水準を代表する高レベルな日本語学習書・教科書と言えよう。前掲の『日語入門』と並んで、清末中国の日本語教科書研究におけるもう一つの重要な発掘といえる。

資料1 『日語独習書』の表紙



資料2 『日語独習書』の奥付



## 2. 『日語独習書』の著者と作成刊行の経過

『日語独習書』は、国会図書館デジタルアーカイブポータル（近代デジタルライブラリー）がネットで公開しているのを筆者が発掘したものである（以下は国会図書館本と称する）。近年、清末の日本語教育史料の収集に取り組む日中両国の研究者と研究部門が多数登場してきた。しかし、同書がネットで公開されてから数年経ったにもかかわらず、今までいっさい取り上げられることがなかったことは、前掲『日語入門』の場合と同じく、本書と清末の日本語教育との具体的な接点を見つけることができなかったからであろう。

『日語独習書』は鉛版印刷であり、文字が規範的で読みやすい。同書は資料1の如く、「村上惠遵、郭祖培 熊金寿合著」となっている。表紙の左下の「東文学堂」だけではどこの東文学堂かは想像しにくい。『自序』の最後には、「光緒二十九年午月下浣 明治三十六年六月中旬 金陵東文学堂言語科卒業生郭祖培 熊金寿全序」の文字が目に入る<sup>11)</sup>。「光緒二十九年午月下浣」は光緒29年（1903）旧暦5月下旬の意で、それに対応するのは新暦の「六月中旬」だったとすれば、1903年は旧暦閏5月だったので、正確には「光緒二十九年閏午月下浣」のはずであろう。発行日は資料2の奥付が「明治三十六年八月七日」となっていて、『自序』の日付は原稿を完全に出版社側に引き渡した日付と考えられる。書

の最後のページには「明治三十六年七月大阪管田活版所製版」とあり、1903年6月原稿完納、7月製版、8月発行というはっきりした流れが見えてくる。要するに、著者の郭祖培と熊金寿は、「金陵東文学堂」の言語科の卒業生で、「村上惠遵」は、「村上惠遵校閲」の意であり、発行者は大阪の石塚猪男藏、発売元は石塚書舗というわけである。この国会図書館本は初版と考えられ、後に再版されたかどうかは不明である。

金陵東文学堂<sup>12)</sup>は、東本願寺が1899年春、南京に設立した日本語学校である。写真1は、劉建雲が10年前、清末中国における東本願寺の東文学堂を調査した時に入手した当時の金陵東文学堂の状況を物語る貴重な一枚である<sup>13)</sup>。撮影時期は1902年6月8日、場所は南京廬妃巷街東文学堂大廳で、ちょうど『日語独習書』が完成する1年前のものである。写真の下方の氏名は、所有者の藤分見慶<sup>14)</sup>が写真の裏側に直筆で記したものである。上方の写真と対応させてみれば、2列目右より6人目は郭祖培、4列目右より6人目は熊金寿、3列目左より1人目は村上惠遵ということがわかる。

村上惠遵は、東本願寺の派遣で1900年10月から1903年11月まで金陵東文学堂で教習を担当していた人物である。同写真に映った他の2名の教習、藤分見慶と岩永法電（4列目左より1人）と比べればかなり若く見え、横に並んだ生徒たちと同年齢にさ

写真1 金陵東文学堂の師弟と一緒に映った郭祖培・熊金寿と村上惠遵先生（1902年6月）



丁汝明	余華榮	魏春官	石声楊	張傑	徐文瀾	汪德林	熊双桂	幡錫籌	許昌光	張仲寅
岩永法電	趙朝木	林文隙	鄭孝達	楊禧	戈季周	熊金寿	崔朝慶	程馨	金潤痒	聶欽權
村上惠遵	李成章	潘斌	江紋波	袁啓生	孫叔榮	李鳴謙	楊士毅	王文鼎	何宗德	藤分見慶
	張家駟	吳全	葉鴻度	卓鼎	郭祖倍	趙仁寿	劉国光	張邦俊	程宗煉	王松祿
		伍步升	唐家駟	呂慶錫		趙翰芬	張家禎	王桂芳		

見える。その年齢の近さが彼と生徒との距離を縮め、教科書の編集について協力関係に発展したのかと推察される。

『日語独習書』の著者が「自序」において、村上との関係、および同書の作成編纂に関して次のように述べている。

日本名士村上君、篤念同文、熱心覚世。命駕金陵、創設東文学堂、伝授普通等学於我国之新少年四載。於茲文明之進化、思想之發達、饒有成效矣。生等従学最早、於言語一門獲益尤深。肆習之余、取平日各種訳本、並語学全課、詳訳彙纂、積而成帙、日語独習書。更與村上先生刪訂而潤色之。生等不敢自私、爰付剗劂、以公諸同胞之有志斯学者、籍表吾師村上君薰陶之沢。（日本人の村上氏は「同文」の便宜を感じ、

世間の風紀開発に熱心である。この度は東本願寺の派遣を受け、東文学堂を創設し、我が国の新少年に「普通学」などを伝授して4年、当地の文明の進化や思想の發達に多大な効果を挙げた。われらは教わるのが最も早く、特に言語学習の面で得るところが多かった。勉強の傍ら、平常触れたさまざまな訳本や、語学の授業すべてを翻訳・整理・編纂し、積み重ねたものが書物となり、『日語独習書』と名付けた。村上先生にも修正加筆をしていただいたため、われわれは自分だけのものにすることが憚られ、ここで刻印に付し、同胞の日本語を学びたい人に公表して、もってわが師村上先生の薰陶に感謝の意を表す。）（句読点、日本語訳は劉建雲。以下同様）

つまり、著者2人は村上惠遵教習に教わることが長かったこと、日常に接したさまざまな訳本や、日本語の授業で取った筆記のすべてを翻訳・整理・編纂して『日語独習書』を成し遂げたこと、その作業の過程において恩師村上惠遵の修正加筆を得たということである。

### 3. 『日語独習書』の構成と作成原則

『日語独習書』は、(1)「自序」3頁、(2)「例言」2頁、(3)「目次」8頁、(4)「五十音・濁音・半濁音・略字」4頁、(5)本文161頁、(6)「例題翻訳」93頁、(7)「附録(多音字表)」2頁、(8)「商用類語」7頁、(9)「常言・敬辞用法表とその用例」4頁からなり、表紙と奥付を加えて計284頁の大著である。

本文に入る前に、「五十音・濁音・半濁音・略字」が位置しているのは、その重要性のためであろう。五十音・濁音・半濁音はすべて片仮名で、その下にローマ字と音注漢字が示されている。ローマ字は、ア行のイとエは*i*と*e*、ヤ行のイとエは*yi*と*ye*、ワ行のオとエは*wa*と*we*で表記し、『東語正規』(唐宝鐸・戡翼聲、1900)にあるような「や行のいえとわ行のゐゑはあ行のいえと同じ発音だ」という注釈はない。音注漢字として、「へ」は「夫葉」のように、「反切」を利用して音注の正確さを追究しようとした点は、清末、日本を遊歴した中国人が編集した最初の日本語学習書『東語入門』(陳天麒、1895)以来の慣例である。その音注漢字は「江寧省(金陵。現在の南京)」方言を使ったと著者が自ら説明している。

本書の3分の1を占めるのは163頁から255頁までの「例題翻訳」であって、「本文」の各章に出た例文の中国語訳と練習の答案、および第三・四編の会話文章の中国語訳などが編入されている。学習者が「本文」でわからないところは、後ろの「例題翻訳」で調べられるような仕組みである。このような編集の仕方は今日では普通になっているが、当時では前例のない独創と言えよう。

本文は大きく四つの編からなり、第一編は10の章、第二編は32の章、第三編は29の章、第四編は5の章があって、内容の多い章は更にいくつかの部分に区切られている。各部分また章は、基本的に単語か会話文章と「例題」、「和訳演習」の三つの部分からなり、その組み方と分量から見れば、だいたい一回の授業で終わられる程度のようなもので、一つの部分または章は、教科書の一つの課と考えていいと思う。

『日語独習書』の作成原則について、「例言」は次の通りである。

- 一 日本語独習書、従前並無著此以公諸世者、今初次創編、其間挂漏疎舛恐所不免。然為初学開導先路、神而明之存乎其人。
- 一 二編以後更編新語、但撰尋常運用極広之類、其詳不遑枚舉。緣学者能以此編熟習後、余可触類傍通。凡文典所載及散見于群書者、俱不難參稽而領會。
- 一 日本語之最浩煩者、唯動詞之語尾變化。若彙載於一編、恐軫滋初学之惑。故另編語典一冊、將付活版、以津逮学者尚宜考核為盼。
- 一 日本語有字異而音同者、如ケーフ、キャウ、皆読キョウ之音。本書為指示入門階梯起見、故第一編不厭繁冗而列挙之。務使学者詳識其音。至第二編以後、又擇八字之變音讀ワ等、以發明之学者解此余可不煩贅述。
- 一 編中仮名字尾有附一者指為長音之意。如シヤウ即ショー之類是也。
- 一 第一編與第二編皆因文字辭句之變化極多、故語意未便分別門類。但設立種々詞宗、凡有關於語尾之緊要文字、連類而摭採之煞費苦心。冀人可知其變化。至第三編以後、則擬訂一種長編問答、以示言語中絡脈貫串之方。
- 一 書中用語專撰淺近、蓋使初学者易学也。訳語亦務與原文相符、故多不雅。致東西語法之異、勢所不免。読者尚無以辞害意幸甚。

要するに、第一編と第二編は、仮名音と実際発音の不一致や長音表記の不統一を配慮して工夫した、第二編では日常で最もよく使われる語彙を選び収録したが、枚挙に遑がなかった、第三編以降は「長編問答(会話)」を設定し、文と文のつながり方を理解させるよう努めた、日本語の中で量が最も多くて難しいのは動詞の語尾変化であるが、一緒に入れるとかえって困惑をもたらすので、別に著す『語典』を参照されたい、文字・単語の変化が繁雑で部門の分類はしなかったが、用言のグループ分けと選別に苦心した、全体の語彙の選択は身近でわかり易く覚えやすいものに努めた、中国語訳は原文に忠実に直訳を取った、というような内容である。

### 4. 『日語独習書』の主な内容

#### 4.1 第一編：文字発音と文法事項との効果的な組み合わせ

第一編は1-37頁で、10の章からなり、「文字発音編」といえる。その内容を整理すると、表1の通りとなる。

第一章から第三章までは五十音、濁音、半濁音の内容である。先に20個か10個ほどの片仮名文字を順番に並べ、次にそれらの音を使った名詞10個、

表1 第一編の内容と文法事項

章目	内容	文法事項	例
第一章	五十音		アサイイケ (浅的池)
第二章	濁音		グズイヒト (鈍的人)
第三章	半濁音		ランプ (洋燈)
第四章	温習	①人称代名詞・「ノ」(連体格)	アノヒトラ
		②指示代名詞・「ハ」(係助詞)	コレハオモイ/アノカキハシブイ
		③①と②の疑問詞・「ガ」(格助詞)	ダレガアノヒトノコドモ
		④場所指示代名詞・「デス」	ドコガアナタノムラデス
第五章	拗音		アノキヤクマハキタナイ
第六章	温習	①動詞・「カ」(終助詞)	你ハ何ガイリマスカ
		②「ヘ」(格助詞)	私ハ役所ヘユキマセン
		③「ニ」(格助詞その1)	ドコニ茶館ガアリマス
		④「ヲ」(格助詞)・授受表現	菓子ヲクダサイ
第七章	促音		你ハナゼ歛席シマスカ
第八章	温習	①「モ」(係助詞)	我モシリマセン
		②助動詞「タイ」	我ガ寧コレヲ売リタイ
		③「ヨ」(間投助詞)・命令禁止	你ハウツカリナサルナヨ
		④「ニ」(格助詞その2)・否定表現	銀ヲ私ニクレマセン
第九章	転呼音	ハ [ワ], ヒ [イ], フ [ウ], ヘ [エ], ホ [オ] や, 「アフ」「 haf」「エウ」「シャウ」「ミヤウ」等	ダイセウ (大小) /ソウテウ (早朝)
第十章	温習	①「ト」(並立助詞)	此瑪瑙ト, 香水トハ, イクラデスカ
		②「ト」(格助詞)	コレハコシヤウト, 申シマス
		③「テ」(接続助詞)・「デ」(格助詞)	其帳面ヲ, 直グ, 持テ来テ, 下サイ/ コノ事ハ, アトデ, 供議シマス
		④「マス」と「ヨリ・カラ」(格助詞)・ 「マデ」(副助詞)	你ノ友人ハドコカラ来マス

形容詞4個ぐらいを片仮名と中国語訳で示し、さらにそれらの形容詞+名詞、例えば「アサイイケ (浅的池)」のような語句を提示するという形である。

第五章は「拗音」である。片仮名2文字で書くが一つの音と読む、2番目の字は小さく書くか線を引く、など読み方と書き方の説明が最初にある。キとギ、シとジ、チとヂの子音による各セットの拗音の後ろに実例として名詞を12個か10個、形容詞を4個ずつ提示している。それに続くのは第四章から始まった「例題」と「和訳演習」である。各セットには「アノ、キヤクマハ、キタナイ」のような例題が4個ずつ挙げられ、「這客堂是狭」のような「和訳演習」が3個ほど出題されている。合拗音の「クウ」「グウ」も取り上げられているが、なぜかニとピの子音による開拗音がなく、ヒ・ビ・ミの子音による開拗音もすべてはそろっていない。

第七章は「促音」で4セットに分けられる。第五章のように単語の実例の後に「例題」と「和訳演習」が続く。第九章は「転呼音」で6セットからなる。八行転呼音のほか、当時通用していた「ケウ」「テフ」などのような旧仮名遣いをも取り上げている。単語・例文・練習の提示方法は第五、七章とほぼ同様である。

第一編で特に注目したいのは、表1にも示されているように文字発音の各章の間に組み込まれた「温習」という第四・六・八・十章の部分である。文法が中心で、基本的で重要な文法事項を系統的に組み込んでいるところに著者の工夫が見られる。指示代名詞について「コノ」は下に名詞が来るとか、「ハ」は普通の時に使うが「ガ」は選択の時に使うとか、日本語の中には中国語の「要不要」のような反復疑問文がないとか、中国人学習者にとって不可欠最小限のことがらを的確に説明している。

本書の最後の部分に「常言・敬辞用法表」がある一方、単語は常体で示さず「イリマス」「シリテイマス」のように提示しているところは、著者が常体と敬体の違いを意識しながら最後まで突きとめられなかったことや、「ホシクナイ」のように品詞の分類や語の区切りがまだはっきり区別できていないことが窺える。「例題」には「你、他、我」のような中国語が多出するのは、速成を求める当時の全体的雰囲気によるものと考えられるが、「和訳演習」に「你是桂圓是愛不愛」「你是何物是不要么」のような不自然な中国語文が多いのは、著者らが授業を受ける際の筆記ノートをそのまま編集したことを彷彿させる。

表2 第二編の内容と文法事項

章目	語彙部類	文法事項	例
第一章	数目	ナラ (仮定)	五ツナラ, アリマス
第二章	月日	ニ (格助詞その3)	你ハ今年イクツニ, ナリマスカ
第三章	時刻	ニ (格助詞その4)	他ハ何ヲシニキマスカ
第四章	曜日・四季・方角	ト (接続)	春ニナルト温カイデス
第五章	天文部	セウ (推量)	今日ハ, 雪ガ降りマセウ
第六章	地理部1	カラ (原因・理由)	今日ハ, 大風デスカラ, 海ニ波ガアリマス
第七章	地理部2	ヲリマス・キマス	我ノ家族ハ城外ニ, ヲリマス
第八章	人倫部1	ガ (逆説)・接頭辞	父ハアリマスガ母ハアリマセン
第九章	人倫部2	マコトニ (副詞)	アノ下男ハ, 誠ニ可愛ラシイ
第十章	身体部1	ネ (感嘆詞)	你ノ顔色ガ青白イデスネ
第十一章	身体部2	ソーデス (伝聞)	你ハ近来御病気ヂーヤソーデスネ
第十二章	身体部3	余リ…ン (副詞の呼応)	咳ハ出マスカ。余リ出マセン
第十三章	家屋部	ホド (副助詞)	病院ノ間ホドアリマス
第十四章	家具部	ニハ	コノ戸ヲ閉メルニハドーシマスカ
第十五章	化粧道具	ハヅ	旦那コレデハ足りマセン一何, 少し余ル筈ダ
第十六章	食事道具	デモイイ・自他動詞	コノ俎デモイイ
第十七章	文具部	ナ (詰問)	オ前ハ今朝硯ヲ筆立ノ上ニ落トシタナ
第十八章	農具部	ナド・副助詞	木ヤ板ナドヲ削ルモノデス/ 碓ニ米ヲ入レテ舂キマスレバ, 自然ト白米ニナリマス
第十九章	服装部	ソースルト	ソースルト, イケマセンカラ, 直ニ方付ナサイ
第二十章	飲食部	…ソーデス	晝飯モソーデスカ
第二十一章	野菜部	オソラク・助動詞	二月頃ニナルト市ニ出カケマス/ソナコトハ恐クハアリマスマイ
第二十二章	菓物部	ソノママ・可能表現	蜜柑ハソノママ食ベラレマス/桃ノ実ハ何頃ニ食ベラレマスカ
第二十三章	草目部	ナント	モ一柳ノ芽ガ出カケマシタネーナント早イ, モノデスネ
第二十四章	鳥類部	ノニ (逆説)	鷺ヲ打獵ガ狙フテキルノニ飛チマセン
第二十五章	魚介類	ナガラ	鍋デ煮ナガラ食ベテモヨロシイ
第二十六章	毛物部	トオモウ・ツモリ	猪ヲ養フト国益ニナルトオモフ/今日ハ馬ニ乗ルオツモリデスカ
第二十七章	虫部	セウ (推量)	蜈蚣ヲ捉ムト直ク刺シマセウカ
第二十八章	職業部	マデ・サエ (助詞)	定マリマセンガ丁稚サエ一元デス
第二十九章	舟車部	ダケ	今日ハ, 上リノ船ガアリマスカーイエ, 下リダケアリマス
第三十章	金石部	バカリ・ダケ (副助詞)	金バカリデハ銭ハ造レマセン
第三十一章	薬部	ヨイニ…ヌ	膏葉ヲオ貼りナサレバヨイニ, ハリマセン
第三十二章	呉服部	ネバナラス	コレハ二年耐エネバナラス

#### 4.2 第二編：語彙収録と文法事項の体系性への配慮

第二編は39-74頁で、32の章からなり、「語彙編」と言える。各章の編集方法は第一編とほぼ同じく、先頭に部門類の単語を並べ、次いで文法事項を一つ取り上げ、第一編の「例題」に代わって文法事項の練習のための会話文か問答文が6個程度続き、最後には中国語を日本語に直す「和文演習」というパターンである。その主な内容を整理したものが表2である。

表1・表2からわかるように、第一、二編は用言活用以外の日本語の基本的な文法事項を網羅し、その組み方は易から難への原則に従い、内容の継続性や系統性にも十分配慮したと考えられる。

語と語句の収録法に関して、清末には三つの流れがあった。一つは前述した梁啓超の『和文漢読法』を代表とする『康熙字典』に照らした漢字の部首順で並べたものである。これは訳書が狙いで、日本語を解しなくても日本の書物を読もうとする清末中国人の便を図ったものである。もう一つは日本の台湾植民地支配初期に編纂された『新日本語集甲号』(1896年、台湾総督府学務部編)<sup>15)</sup>が代表するイロハ順に編集したもので、日本語を音声から学ぶ学習者が利用しやすいため、現在まで通用している。三つ目は「日本館訳語」など明代以来の日本語研究書が慣用し、清末の長谷川雄太郎の『日語入門』にまで受け継がれた部門類提示法である。『日語独習書』は三つ目の中国人日本語研究の慣例に従ったのである。

4.3 第三編：会話の内容と、そこから読み取れる中国の社会事情

第三編は75-138頁で、29の章からなり、著者が「例言」において「長編問答」と称する。「上級会話編」のようなものである。各章は、先に重要語句として「決シテ」「キニ入ル」のような副詞や連語を2個ずつ挙げ、次いで順番に会話文章と「問題」か「和訳演習」・「要緊語（重要表現）」である。会話文章は資料3の如く、2人の対話を上下2段、十数行から二十数行ほどに生まれ、題目別には、新年・訪問・新店訪問・散歩・学校・書籍屋・雑貨店・税関・呉服屋・銀行・郵便局・衙門（役所）・医院・赴宴（宴会出席）・寺・農夫・飯館（料理屋）・汽車・船・車・借家・客棧（宿屋）・芝居・盗難・春・夏・秋・冬・年末となっている。

第一・二・三章と第十・十一章は、会話文章の作成に話題の連続性を大事にしたところが見られる。「和訳演習」と「要緊語」は会話文章に入りきれなかった表現を、使用頻度の高い重要表現として中国語と日本語の文を各4個ずつ取り上げている。全体として量的にも内容的にも中上級レベルのものと思われる。当時中国に滞在した日本人、あるいはそのような日本人とふれあいをもった日本語学習者を含む中国での生活に、必要不可欠と考えられるすべての内容が網羅されているように思われる。

会話文章の内容から、百数年も前の南京における教育事情や活発な翻訳出版事業、また、外国人が中国の税関を出入りする時の様子が読み取れ、文化史料としての価値もある。

例えば、そこに出ている学校は金陵東文学堂のことと考えられるが、次のようなことが語られている。教育科目には地理・歴史・数学・漢文・外国語などがあり、学制は5年、前の3年間はもっぱら外国語の勉強で、残りの2年間は習得したその外国語で直接外国人教師から他の普通科目の授業を受ける。授業は毎日朝8時から始まり、1コマは45分、間に15分の休憩を取る。教科書を使う科目もあり、教師が口授してひたすら生徒に筆記を取らせるものもある。1学年は2学期で、試験も1年に2度ある。授業開始は前期が旧暦1月、後期は8月である。週6日制で、日曜日だけ休む。入学料は1元、授業料は月々1元。学校に寄宿舎があり、寄宿する場合は授業料のほか食費3元に燃料費も持参しなければならない。

また、本屋では新刊書の予約もでき、地図などの出版依頼も可能であるとか、税関では外国人が出国する際に荷物は全部中身まで検査を受け、贈答品以外は購入価額の20%を課税されるとか、日本人がよく持ち込むのは夜具類や衣服類であったとかも語られている。

資料3 『日本独習書』88-89頁

<p>運書誰邀的 要書套不要</p> <p>此字引ハ、ドーンシテ、引キマスカ。 快ニ入レテアリマス。</p> <p>就是了。ラロロシイ オボシクダスガ、船子ヲ見セテ下サイ。</p> <p>伊。 甚麽的。 埃ッ衫ダチ、コレガ流行ノカチ。 唯今皆様、コレヲ、オ買イマス。</p>	<p>要緊語</p> <p>コレハ寫レタノデス。 此書ハ漢字ガ多イ。</p> <p>雜貨店</p> <p>コレハ佛蘭西出來デス、皮ハ半デス。</p> <p>コレヲ穿テゴラン、コレナワイイデセウ。</p> <p>一册、オマケ申シテ、五圓デス。</p> <p>船來デスモノ。</p> <p>外ノ店、ヨリ高フ御座イマシタラ、例時デモ、オ銀ヲオ還シ、シタラヨコレイ。</p> <p>冗談ヲ、正札カ付ケテアリマス。</p> <p>ソレハ菓子製デス、コレハ當地デ出來マシタノデス。</p>	<p>國語</p> <p>カラ、大分カカリマス。</p> <p>我的先生的朋友邀的 你會說日本說麼</p>
---	--	---

さらに、第十五章では本願寺のことが紹介され、第二十章には次のような会話が綴られている。清末

車ニ乗ウ。大分疲レタ。  
ハーイ、檀那ドチラヘ。  
イクラデモヨロシイ。オ乗り下サイ。  
イクラオヤリ下サル。  
十銭オヤリ下サイ。  
三里ハ十分アリマス。  
何ヲ仰ッシャリマス。標程ヲゴランナサイ。  
成ルベク、近道ヲ通テユケ。

エロー、ユルナー、倒シマイゼ。

#### 4.4 第四編：文章単位の議論

第四編は139-161頁で、5の章からなり、「実用会話編」と称すべきものである。第一編から続いた「和訳演習」の欄目がなくなり、第三編に始まった「要緊語」のみが残っている。内容は第一章「新任拜会（新任挨拶）」、第二章「回拜（答礼訪問）」、第三章「訪問」、第四章「問留学生」、第五章「官務議論」となっている。

「新任拜会」は、新任の日本領事が当地の地方長官へあいさつに行った場面の対話である。同日本領事はアメリカの公使館に勤務した経験があり、学歴は「大学出身デ法学士」という設定である。

「回拜」は、地方長官が長崎の中国領事館で2年ほど勤務したことのある「兵部尚書」という中国人同僚を連れて日本領事館へ答礼訪問に行った話である。新任領事も長崎の出身で話が弾み、地方長官が日本領事のことを「欽差大人」と呼ぶところなどがおもしろい。「欽差大人」は朝廷や皇帝の全権代表の意で、外国領事を呼称するのにもっともらしいが、滑稽な感じがしないわけでもない。

「訪問」は、2年前から「洋務局」<sup>16)</sup>の翻訳官を勤めている「嶋」という日本人が、遊歴に来たまったく中国語の知らない同郷を連れて地方長官を訪ねた時の話である。話題は当地の風習の開化や諸般制度の改革に及び、長年の因習守旧の慣習を破ることの難しさや何事も思い通りにできない官僚の苛立ちさも会話に出てくる。激動時代の中国上層部のもどかしさを感じられる。「嶋」は日本の外国語学校で中国語を勉強し、北京留学の経験もあって、流暢な「官話」（北京語）が操れるという設定であるが、彼の語学力の強さを日本が「同文ノ国」だからと帰するところは、明治期の日中両国の言語の類似性に対する共通意識を反映している。同章の「要緊語」に、

中国の社会状況の一端が窺える。

人力車ハ一向見ヘナイ。オーイ、車屋。  
借家町マデ、イクラカ。  
値ヲ定メネバ乗レナイ。イクラダ。  
手前カライッタライイヂャナイカ。  
十銭、無茶ナコトヲ云ウナ。  
大キナコトヲ云フナ、二里ナイヨ。  
デハ乗ロウ勢一杯走レ。  
此大通ヲ真直ニ行テ。付当テカラ、左へ、曲リマセウ、ソレガ一番近道デス。  
大丈夫デス。気ヲ付テキマスカラ。

（筆者注：原文の漢字には振り仮名が振られている）

語学教師を招聘する時の交渉用語も出ており、清末中国での日本人教師の需要量は想像を超えるものがあつたと考えられる。

「問留学生」は、日本へ教育視察に来た若手官僚が東京の清国公使館を訪れ、単身赴任の外交官に中国の妻子へ持ち帰るものはないかという話である。

「官務議論」は、現地の役所で日本領事館の人が役人と、ある殺人事件の裁判について意見交換する対話である。

すべての会話文章は実用性が高いだけでなく、文章単位の高レベルな議論となっている。この程度習得できれば立派に外交通訳もこなせるのではという欲張りな教育の時代特徴が窺える。

#### 5. 植民地初期の台湾の日本語教科書との関連

金陵東文学堂は、清末日本人が中国に設立した日本語学校のなかでもっとも成功した一例である<sup>17)</sup>。同学堂の日本語教育について、1901年6月、堂長の巖円誠が現地の日本領事館宛に提出した報告書のなかで次のようなことを述べている<sup>18)</sup>。

外人の我国語を学ぶ者に対しては、別に適當なる教科書無かるべからずと雖も、從來特に此目的に向て編纂せられたるもの一も有るなし。本学堂は或る日本小学用読本等を採用し来れりと雖も、其尋常科用のものは思想卑近に失し、其高等科用のものは文章高尚に過ぎ、且つ其材料に至りては両者共支那人に対し極めて不適當たるを免かれず。且つ我邦は尚ほ言文二途に岐し、文章語においては文典ありて文法を教ゆるが故に、口語においても語法を教ゆる語典と称すべきもの無かるべからずと雖も、此の種の著作未だ多からず、口語の教授は最も困難な事業たり。案ずるに台湾総督府に於ては、前年来頗

る此事を研究し、近頃佛人ゴアン著言語教授術の主義に基きて会話書及読本を編纂せられたり、然れとも其書未だ完全なりと云うを得ず、且つ直ちに本学堂に適用し難きものあるは甚だ遺憾とする所なり。然れどもゴアンの言語教授術に云う所は一種出色の説にして、彼のナルレンドルフ等の説に比すれば大に優れる所あるが如し、因て本学堂も現在の教授法は此説及台湾総督府編纂の書に取る所多し（句読点は筆者）

外国人に日本語を教える場合は特別な教科書が必要であるがそのような教科書は従来いっさい編纂されていないこと、日本の小学尋常科・高等科用読本を採用したがそれらは内容にしても言語表現にしても教材としては極めて不適當なこと、口語文法の専門書がないため口語の指導がもっとも難しいことなど、清末にわかに現れた中国人の日本語学習ブームをめぐる教育環境の未整備状態は、前掲劉著 [2005] 第7章第1節においてすでに考察を行ったので、ここでは贅言を控える。肝心なのは巖円誠のいう「現在の教授法は此説（ゴアンの言語教授術）及台湾総督府編纂の書に取る所多し」という点である。

つまり、金陵東文学堂の場合も広州同文館の長谷川雄太郎と同じく、台湾で行われた日本語教育の先行経験に着目したに相違ない。おもしろいことに、台湾の日本語教育は最初も大陸の状況とほぼ変わらず、同じく日本国内の小学読本で敷衍していた<sup>19)</sup>。その傍ら、学務部が主宰して編纂に手掛けたのは『日本語教授書』（1895年7月、本文50頁の仮綴洋装本）、前掲『新日本語言集甲号』（1896年2月、本文86頁の仮綴洋装本）、『台湾適用会話入門』（1896年11月、39丁の合綴本）という3冊である。この3冊こそ対外国人の日本語教育にふさわしい本格的な教科書と言えるが、内容的にも分量的にもまだ十分とはいえない。

蔡茂豊氏の考察によれば、『日本語教授書』はすでに現存せず、『新日本語言集甲号』が「台湾人の日本語学習というよりも日本人の台湾語学習に適し」ているという。大陸の日本語教育にとって参考となるのは『台湾適用会話入門』のほうと言えよう。『台湾適用会話入門』は第一部「請求及諾否」、第二部「疑問と問答」の2部からなり、上下2段に分け、上段は日本語、下段は台湾語の対訳という組み方となっている。本稿で取り上げる『日語独習書』の作成に台湾の同時期の教科書を参考にした可能性があるとするれば、『台湾適用会話入門』の上下2段の組み方のみと考えられる。ただ、前者の場合は上段が日本語、下段は台湾語の対訳という形であるが、後者は上下段がそれぞれ2人分の対話に分けていて、

必要な対訳はまとめて本書の3分の1を占める「例題翻訳」に入っているところが、いちだん、進歩した編集の方法といえる。

巖円誠の報告書に言及されているゴアンの言語教授術は、現在「グアン式教授法」とか「グアン法」とか言い、学習者の母語を用いる従来の対訳法と違って、学習者の母語を用いない直接法の一つとして評価されてきた。「台湾総督府に於ては、前年来頗る此事を研究し、近頃佛人ゴアン著言語教授術の主義に基きて会話書及読本を編纂せられたり、然れとも其書未だ完全なりと云うを得ず」とあるのは、1901年に台湾総督府図書編修職員官制のもとでグアン式教授法を取り入れ編纂した『台湾教科用書国民読本』のことを指していると考えられる。同読本は全12巻で、巖円誠が現地の日本領事館に報告書を提出した1901年度は、その半分しか完成されていないかった。

グアン式教授法は、(1)聴覚器官を用いる、(2)文単位で習得する、(3)思考の順序に従って言語を用いるという、幼児の言語習得の特徴を理解し、その言語習得の自然の過程を外国語教育に適用させようとする方法である。『台湾教科用書国民読本』巻一の課目を見れば、グアン式教授法とはどんなものかが理解できる。第一課「オトコノコガオキマシタ」、第二課「オンナノコガキモノキテキマス」、第三課「洗面」、第四課「掃除」、第五課「食事」、第六課「登校」のように、児童の日常行為をその行為に関する言葉を教えるという「観念聯合」の働きによって日本語を順序よく連ねて行くのである。このような内容と組み方は、漢文素養をもつことを前提に入学した金陵東文学堂の成人生徒にとって当然「適用し難きもの」にちがいない。

以上考察してきたように、金陵東文学堂の日本人教師達は植民地初期の台湾で先行した日本語教育の実績に目を向けたものの、『日語独習書』は台湾の同和教育に使われた『台湾教科用書国民読本』などの教科書を参考にして作ったものとは考えられない。

## 6. 『日語独習書』の特徴とその歴史的な位置づけ

『日語独習書』がそれまでの多くの日本語教科書と異なり、清末日本語教育の現場である金陵東文学堂の生徒により作成・編纂されたものである。本稿で考察してきた郭祖培・熊金寿著『日語独習書』の特徴を箇条書きにすれば以下の如く挙げられる。

- (1) 音注漢字は南京の方言を使っている。
- (2) 仮名音と実際発音の不一致や表記の不統一にもっとも苦勞し、多くのスペースを割いて説明している。

- (3) 各章の例文や会話文章の中国語訳と練習の答案は、後ろの「例題翻訳」に一括してまとめられている。学習者が調べやすいように工夫されているだけでなく、学習書・教科書として無駄がなくコンパクトな印象がある。
- (4) 章目や部分セットの仕分けが整然としていてわかりやすく、例文や練習の提示方法や分量には統一性が見られる。
- (5) 各章また部分ごとの分量はだいたい一回の授業で終わられる程度に工夫されていて、これは現在なお参考の価値がある。
- (6) 文字発音、部門語彙、会話文章の間に文法事項が系統的に組み込まれ、用語・文法事項の継続性と体系性も十分配慮されている。
- (7) 清末の日本語教科書における単語の収録には三つの方法がある。一つ目は『康熙字典』に照らして漢字の部首順で並べる方法、二つ目はイロハ順で編集する方法、三つ目は「日本館訳語」など明代以来の日本語研究書が慣用した部門類提示法である。『日語独習書』は三つ目の中国人日本語研究の慣例に従っている。
- (8) 例文は文節の後ろに「。」を入れたり、助詞や助動詞の脇に線を引いたり、新しく取り上げた文法事項の脇に二重線を引いたりして、読みやすいように努めている。
- (9) 会話の文章は現地の社会、生徒・教師の生活、時代の様相を色濃く反映する内容が多く、実用性が高い。
- (10) 会話文章の内容から、百数年前の南京における教育事情や活発な翻訳出版事業、外国人が中国の税関を出入りする時の様子などが窺え、文化史料としての価値もある。

以上の多くは、当時においては前例がないことであり、本書の独特なところと言える。

『日語独習書』は、用言の活用を除く発音・文字表記、語彙、文法、会話、文章単位の高レベルの議論などの学習をすべて全うしようとした盛り沢山の一冊である。そのスタイルの整然さといい、内容の豊富さといい、いずれも著者らが在籍していた金陵東文学堂の日本語教育のレベルの高さと学習者の並々ならぬ学習意欲を物語っている。実際に著者の1人である郭祖培は、同書が刊行された1年後、金陵東文学堂の助教習として採用されている。同学堂の卒業生のなかでは同学堂また他の学堂の教習となった者も数人いる。

一方、『日語独習書』は生徒が「語学全課（日本語の授業で取った筆記のすべて）」に基づいて作成・編纂したものであるため、現在から見れば次のよう

な不十分な点もある。

- (1) 品詞の分類や語の区切り、「常言・敬辞」の使い方に混乱が見られる。
- (2) 中国語を日本語に直す練習に「你是桂圓是愛不愛」「你是何物是不要么」のような不自然な中国語の文が目立つ。
- (3) 「蜈蚣」や「膏藥」のような日中同形同義語が当時大量に存在したため、漢字語の学習を重要視せず、中国語の人称代名詞である「你、他、我」や、「鬆的ヲ」・「オ錢」などの中国語をそのまま使用している。

とはいえ、郭祖培・熊金寿著『日語独習書』は今までにない、清末中国の日本語教育の内容と水準が反映された、もっとも完成度の高い教科書と言える。同教科書の考察は、日本語教育史研究における清末東文学堂の口語指導用の教材史料の不十分による研究の空白を埋めることとなった。それだけでなく、同時期の台湾で実施されたそれを上回る高レベルの日本語教育が中国大陸で展開されていた史実を明らかにした。

注：

- 1) 中国における本格的な日本語教育の始まり、および京師・広州両同文館で行われた日本語教育について、劉建雲著『中国人の日本語学習史—清末の東文学堂—』学術出版会／日本図書センター、2005年11月（以下「劉著」と略す）pp.70-87・pp.229-239、および劉建雲「清末の日本語教育と広州同文館」『中国研究月報』No.622、1999年12月に詳細な考察が行われている。許海華「近代中国日語教育之発端——同文館東文館」（『日語学習与研究』2008年第1期）は、注の中で数カ所みずから確認できなかった一次史料を劉著〔2005〕からの再引用と示しながら、多くの観点と内容も劉著を踏襲している。氏の元指導教官王宝平は、「自分の説」と「他人の説」を区別しなかったところに同論文の問題があると釈明し、氏本人も論文を改めて修正すると誓った。
- 2) 石雲艷「『和文漢読法』的主要内容及其歴史評価」（『解放軍外国語学院学報』第27巻第6期、2004年）は、「『和文漢読法』的主要内容」と「『和文漢読法』の歴史評価」の2節からなる。その2節目の「『和文漢読法』の歴史評価」において、氏が5点を述べたが、1点目の、明治期の日本語の言文分離の実態についての考察（p.94右24-41行）は、劉建雲が2001年3月岡山大学大学院文化科学研究科に提出した博士学位論文『清末の同文館と東文学堂に関する研究—中国にお

- ける日本語教育史の視点から一」(以下「劉博士論文」と略す)から無断引用したものであり、(同内容は前掲劉著 [2005] pp.219-221に収録。)4点目のp.95右25-43行は、本稿注6に指摘されたように劉建雲が1999年に公表した「漢文和訳法」という清末の時代特徴をもつ速成教授法の論点を無断使用したものである。(同論点は前掲「劉博士論文」[2001]及び劉著 [2005]にも収録。)氏は、2002年京都大学人文科学研究所に短期留学に訪れた際、劉博士論文 [2001] を入手し、関連の部分と内容を参照・引用したが、注を付けなかったことを認めている。
- 3) 「論学日本文之益」『清議報』1899年2月:「東籍月旦」『新民叢報』第9号, 1902年6月
  - 4) 『和文漢読法』の版本とその考証などについては、夏曉虹「『和文漢読法』」(『清末小説から』No53, 1999年4月)が詳しい。ここでは、梁啓超研究の第一人者である京都産業大学教授狭間直樹先生よりご提供いただいた夢花盧氏本に依拠する。
  - 5) 劉建雲「清末東文学堂についての一考察—中国人設立の東文学堂と日本語教育を中心に—」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第8号, 1999年11月 pp.175-177参照。同論文が掲載されてから9年後、2008年第3期の『中国大学教学』にまったく同じ論点の、「王昇遠・唐師瑤」と署名した「蔡元培的東文觀与中国日語教育」という論文が掲載されている。
  - 6) 前掲劉建雲 [1999.11] pp.177-179参照。なお、前掲石雲艷 [2004] は、その2節目の「『和文漢読法』的歴史評価」という部分において、劉建雲が数年前に判明した「漢文和訳法」(下線は筆者、以下同様)という清末の時代的特徴をもつ教授法を、一文字を変えて「漢文和読法」と称し使用している。劉の「漢文和訳法」は当時の多くの文献史料に基づいて名付けた名称で、その一文字を変えられた理由はわからない。許海華はその碩士学位論文『清末官辦日本語教育之研究』(2007年5月, 浙江大学), および「京師訳学館日文科之研究」(浙江工商大学日本文化研究所『日本思想文化研究』第9期, 2007年6月)という論文のなかで、「漢文和読法」という呼称を借用し、嚴安生「中国日語教育草創期初探」(『中国日語教学研究文集』5, 1994)という論文の中の「和文漢読」を「漢文和読法」と誤って引用している。
  - 7) 前掲劉著 [2005] 附表6「清末中国人編集の教科書」と附表7「清末中国発行日本人編集の教科書」参照。
  - 8) 前掲劉著 [2005] pp.222-229に詳細な考察がある。
  - 9) 前掲劉建雲 [1999.12] および劉著 [2005] pp.229-239が詳しい。
  - 10) 『解放軍外国語学院学報』第26巻第2期, 2003年3月
  - 11) 原文は縦書きで、年月と著者の名前は横並びになっている。
  - 12) 詳細は、劉建雲「清末中国における東本願寺の東文学堂」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第10号, 2000年11月, および前掲劉著 [2005] 第5章を参照されたい。
  - 13) 前掲劉建雲 [2000.11], および劉著 [2005] 口絵3を参照。
  - 14) 4列目右より1人目。金陵東文学堂創設の当初から1902年7月まで同学堂で教習を担当。劉著 [2005] p.182参照。
  - 15) ここでは、蔡茂豊が1977年筑波大学に提出した博士学位論文である『中国人に対する日本語教育の史的研究』による。
  - 16) 外国との事務や商売を取り扱う清末中国の役所。
  - 17) 東文学堂の概念と定義、および清末中国に現れた大量の東文学堂に関する個々の考察とその分類については、劉著 [2005] を参照されたい。
  - 18) 「南京金陵東文学堂ノ概況取調書在上海総領事館ヨリ送付ノ件」『学校関係雜件』二 所収
  - 19) 以下は前掲蔡茂豊氏の博士学位論文 [1977] による。